

# 英語による体育実技指導に対する心理的抵抗に関する一考察

久保田 秀 明・関 田 一 彦

## 1. 研究の目的

日本人の英語能力はその訓練期間の長さに対して、国際的に低いレベルとされている。最近の学校教育改革でも小学校段階から英語活動の導入が検討され、既にその試行が始まっている。英語圏においては移民に対する英語教育が公教育の大きな課題となってきた。英語を母国語としない者に対するその教授法はESL (English as a Second Language) プログラムとして研究開発され、アメリカなどでは教育系の修士課程に専門の教員養成プログラムをおく大学も多い。

またカナダでは、公用語（英語またはフランス語）を第2言語とする者に対して、教授する側が現地の公用語を外国語として意識させるのではなく、まったく第1言語と同様に扱って教授する、イマージョンプログラム (Immersion Program) の研究が盛んである。イマージョンプログラムは、言語を教科として教授せず、習得すべき言語の環境に、文字通り学習者をどっぷりと浸すことを主眼としている。バンクーバーを例にとると、学齢期の子供たちの約60パーセントは、英語以外の言語を第1言語として習得しており、その言語数は140種以上になる。このような背景の中で、効率の良い英語教育を志向して実施されたイマージョンプログラムは、優れた成果をあげてきた。学習者の第1言語による解説を加えず、英語を情報伝達のツールとして英語以外の教科の授業を行っている。その結果、英語を第1言語としない児童の90パーセントが、18ヶ月以内に英語を母国語とする同級生と同等の英語の能力を習得している (Siegel 1999)。一方、イマージョンプログラムの効果が芳しくなかった児童 (全体の10%) には、彼らの母国語における言語能力にも同様の問題があり、イマージョンによる外国語の習得には、母国語の発音、語彙、読解など十全なコミュニケーションの基礎になる能力の高低あるいはレディネスが影響している (Siegel 1999)。

このイマージョンプログラムにおいて、児童たちの言語的な障壁を乗り越える手助けとなったものは、英語の文字や音声による情報伝達を補完する、身体的活動を伴った活発な双方向的なコミュニケーションであり、その機会を学習者たちが不可避免的に共有する、学習活動の構造であると考えられる (Siegel 1998, 1999)。言い換えると、言語によるコミュニケーションを補完する手段 (身体表現など) が学習活動に組み込まれることで、母国語であるか外国語であるかを問わず、コミュニケーションの効率が上がり、ある程度の言語能力を有する者はイマージョンプログラムの恩恵に与ることができるのであろう。

久保田は在外研究で滞在したブリティッシュ・コロンビア大学の付属校において、このイマージョンプログラムの実際を観察する機会を持ち、身体活動を媒介として言語を学ぶ有効性を確認した。そこで、大学における体育実技の授業を英語による指導のみで行うことが可能かどうか検討することにした。大学生の多くは、その入学段階で英語による選抜を経験しているから、英語力という点では大学に進学しない同年齢の者より、その能力は高いと思われる。しか

しながら、語学の修得には知識としての英語ではなく、英語を学ぼうとする態度の方が重要であり（久保田・関田2001）、大学生を相手にした体育のイマージョンプログラム実施にとって望ましい態度に関する理解が必要となってくる。

そこで、本学の学生が全学の共通科目である体育実技が英語でなされることに、どのような反応を示すかを調査することにした。具体的には、体育実技の指導が英語でなされることに対する受容度を求め、その高低に影響する要因を探索することがこの調査の目的である。直接的には英語を学ぼうとする態度と体育に取り組む態度からの影響が考慮されるだろう。すなわち、英語も体育もどちらも好きならば、英語による実技指導を望む度合いは大きいと予想される。ただ、英語嫌いの体育好き、あるいはその反対の場合は、英語による実技指導への受容度はどのように変わるのだろうか。また、体育実技にはバレーやテニスなど、チームで活動する種目も多い。仲間同士で英語を使つてのコミュニケーションに対して不安を覚えたりすることもある。したがって、単に英語の好き嫌い（学習意欲）だけでなく、その学習活動との関係からコミュニケーション能力（対人関係技能）なども体育のイマージョンを実施する上では注意する必要があるであろう。この点についても、いくつかの対人能力指標との関係を探索してみたい。

## 2. 研究の方法

### 調査対象

2001年度前期「体育実技」履修者を対象に、研究者の一人が授業終了時に質問紙を配布し、調査の協力を依頼した。可能なかぎりその場で記入させて回収したが、若干の者が自宅に持ち帰り、翌週の授業時に提出したケースも含めた。448名分の調査紙を回収したが、性別の無記入など回答に不備の多いものを除き、438名分（男子210名、女子228名）を有効回答とした。

### 尺度の構成

本調査の主な目的は、英語による体育実技指導に際しての心理的な抵抗要因を探ることにある。そこでまず、1) 体育そのものに対する態度、2) 英語学習に対する態度、および3) 英語による実技指導に対する態度の3点に関する尺度を作成した。なお、この3つの尺度を構成する全ての項目は、「とても当てはまる」・「いくぶん当てはまる」・「判断がつかない」・「あまり当てはまらない」・「全く当てはまらない」の順に5点～1点までの5件法を用いた。

#### 1) 体育（スポーツ）に対する態度（ $M=9.80$ , $SD=3.05$ , $\alpha=.81$ , $n=437$ ）

1. 自分にはスポーツの才能がある
2. 体育は得意である
3. 自分にはスポーツの才能があるとは思えないので、スポーツの上達はあきらめている（反転項目）

#### 2) 英語に対する学習意欲（ $M=22.08$ , $SD=5.20$ , $\alpha=.79$ , $n=435$ ）

1. 英語の授業は楽しい
2. 学部の専門科目などを英語で講義するクラスを受講してみたい
3. シェイクスピアやエマソンを英語のまま理解したい
4. 留学してもっと英語力（語学力）を磨きたい

5. 自分に語学の才能があるとはあまり思えないので、英語の上達はあきらめている（反転項目）
6. 海外のTVを見て英語のジョークで笑えるようになりたい

3) 英語による実技指導を求める傾向 ( $M=9.33$ ,  $SD=3.24$ ,  $\alpha=.82$ ,  $n=437$ )

1. 英語でスポーツの指導を受けてみたい
2. 体育実技の指導のように言葉と動作が一致しているものなら、英語で指導されてみたい
3. 体育は好きだが、英語で指導される体育なら履修したくない（反転項目）

次に、英語を話すことに対する自信（自己効力感）を測定するために、1) 授業で友人に対して、2) ネイティブの英語教員に対して、3) チット・チャット・クラブにいる留学生に対して、4) 街で知らない外国人に対して、5) LL教室のブースでマイクに向かって、という五つの状況ごとに、どの程度自信があるかを100点満点で点数化させ、その合計を英会話に関する自己効力得点とした ( $M=149$ ,  $SD=92.36$ ,  $n=431$ )。

さらに、体育実技の指導を英語で受けるという未経験な課題に対して、英語や体育の能力や態度ではなく、もっと一般的な個人の心理的傾向の影響を探ることが本調査の第二の目的である。そこで、まず日常生活における未経験な課題に対して積極的に取り組もうとする態度あるいは意欲を測る尺度を作成した。また体育実技の授業では、その競技中に他のメンバーとのコミュニケーションが発生する。日本語による他者との意志疎通に困難を感じていれば、おそらく英語という不慣れな言語によるコミュニケーションにはさらなる困難を予想するであろう。そこで周囲とのコミュニケーションを効果的に行う自信の度合いを測る尺度を作成した。加えて、英語による指導に対して十分な理解を得る段階に至るまでは当然ながら、曖昧な予断や推量による身体反応を繰り返すことになる。身体運動と英語による指示の不一致を試行錯誤的に乗り越える過程で、英語力が身に付くことが期待されるのである。しかしながら、自らのヒアリング力を頼りに多様な身体の動きを自己決定する際の心理的な負担は少なくないと思われる。そこで、日常的に自己決定の機会を消極的に捉える傾向を測る尺度を作成した。

具体的には以下、5) 挑戦意欲、6) 対人関係効力感、7) 自己決定回避指向の3尺度である。なお、この3つの尺度を構成する全ての項目は、「とてもそう思える」・「いくぶんそう思える」・「判断がつかない」・「あまりそう思えない」・「全くそう思えない」の順に5点～1点までの5件法を用いた。

5) 挑戦意欲 ( $M=28.11$ ,  $SD=3.79$ ,  $\alpha=.66$ ,  $n=435$ )

1. 一生懸命勉強すれば、もっと自分の才能を伸ばすことができる
2. たとえ自分が成長できるチャンスでも、失敗する可能性が高いなら挑戦したくない（反転項目）
3. 失敗を恐れて、やりたいことを我慢してしまうことが多い方だと思う（反転項目）
4. 人生は運命によって決められているから、自分の力ではどうすることもできない（反転項目）
5. 一般に仕事でも勉強でも、才能がなければ努力しても成果は上がらない（反転項目）
6. 失敗してもその経験が自分のためになると思えば、難しい仕事や目標でも挑戦したい
7. 将来何になるかについて、いくら考えてもその通りにはいかない気がする（反転項目）

6) 対人関係効力感 (M=19.51, SD=4.25,  $\alpha$ =.64, n=434)

1. クラス替えなどで見知らぬ人が集まると、新しい友だちを作るのに時間がかかる (反転項目)
2. どんなに努力しても、自分の気持ちを理解してもらうのは難しい (反転項目)
3. その気になれば、誰とでも友人になれると思う
4. きっかけがあれば、新しい友だちをつくりたい
5. 意見の対立などで気まずくなると、なかなか相手との関係を修復できない気がする (反転項目)
6. 一生懸命話せば、こちらの気持ちは相手に伝わると思う

7) 自己決定回避指向 (M=13.98, SD=3.63,  $\alpha$ =.69, n=435)

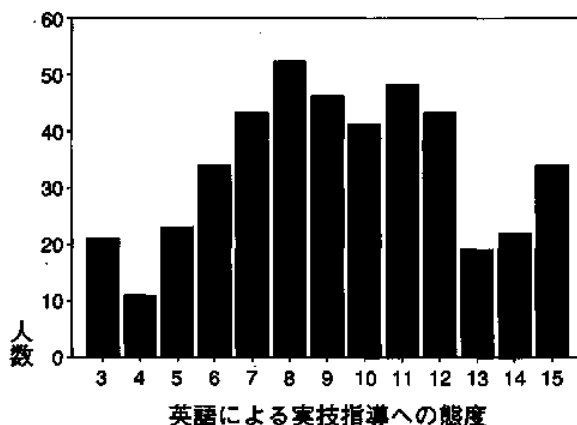
1. 自分で自分の人生を決めていく自信がない
2. 何か意志決定をするときは、誰かの指示を受けないと不安になる
3. たいていの場合、自分自身の決断には自信がある (反転)
4. 自分の考えを押し通すよりも、相手の意見に自分を合わせる方だと思う
5. 自分が何かを決めるより、人に決めてもらった方が安心である

### 3. 分析の結果

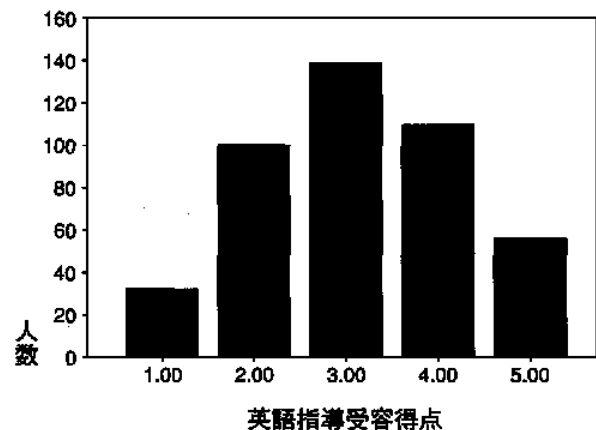
#### 英語による実技指導への態度

まず、今回の調査対象となった学生たちの、英語指導に対する態度を調べた。グラフ1に示すように、英語による体育実技に積極的な学生と消極的な学生が、それぞれにかなりの割合で存在している。本来、各尺度の得点は正規分布を想定しているが、グラフに表れたように、英語による実技指導への態度(英語による実技指導を望む度合い)を測る尺度には両端への偏りが認められる。そこで、3点、4点をどちらも1点、5~7点を2点、8~10点を3点、11~13点を4点、そして14、15点を5点とする新たな英語指導受容得点を合成した。得点の分布はグラフ2に示すとおり、正規分布に近似したものとなった。なお、英語による体育実技に積極的な学生(歓迎群)と消極的な学生(拒否群)をそれぞれ英語指導受容得点が5点および1点の者とする、歓迎群は57名(全体の13%)であり、拒否群は32名(全体の7.3%)になる。(これ以降の統計処理においては、「英語指導受容得点」を英語による指導を望む度合いとして用

グラフ1 英語による指導を望む度合い



グラフ2 調整後の英語指導の受容得点分布



いる。また、他の尺度については概ね正規分布しており、ここでのグラフ表示は省く)。

### 尺度間の相関

次に各尺度間の相関関係を求めた(表1参照)。英語指導に対する態度に最も影響すると思われる英語への学習意欲と英会話に関する自己効力感、ならびに体育実技への肯定的態度の3尺度は、いずれも英語による実技指導に対する態度に対して有意な正の相関関係を示した。特に、英語に対する態度は他の尺度よりも強い関係を示した。まとめると、1) 自らの英会話力に自信があるほど、英語による実技指導を肯定する傾向、2) 英語を学ぶ意欲が高いほど体育実技を英語で行うことを歓迎する傾向、および3) 自らの体育技能に自信があるほど、実技指導を英語で行うことを受け入れる傾向が認められた。なお(当然ながら)、体育に対する自信と英語の学習意欲との間には正負いずれの意味においても相関は認められなかった。

また、英語による実技指導に対する態度に影響しそうな一般的心理傾向を測る3つの尺度のうち、挑戦意欲と対人関係効力感に関しても、英語指導に対する態度との関係で有意な相関を示した。なお、挑戦意欲は英語に対する態度と中程度の相関を示しており、英語を勉強しようと言う意欲は困難を伴っても自己成長しようとする態度と重なり合う部分の大きいことが示唆される。さらに、挑戦意欲は対人関係効力感および自己決定回避傾向とも比較的高い相関を示しており、これらが測っている一般的心理傾向があるいは想定した以上に類似したものであった可能性が考えられる。

表1. 各尺度間の相関関係

	英語に対する態度	体育に対する態度	英語指導受容度	挑戦意欲	対人関係効力感	自己決定回避指向
英会話効力感	.41**	.17**	.32**	.20**	.08*	-.17**
英語に対する態度		.06 <sup>ns</sup>	.44**	.33**	.23**	-.09 <sup>ns</sup>
体育に対する態度			.32**	.21**	.17**	-.21**
挑戦意欲			.26**			
対人関係効力感			.22**	.47**		
自己決定回避指向			-.09 <sup>ns</sup>	-.48**	-.27**	

note) \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

### 重回帰分析

英語による実技指導に対する肯定的な態度を形成する要因として、今回用いた尺度の中で何が重要であるのか検討した。英語指導受容度を目的変数として、それ以外の全ての尺度を説明変数として強制投入法で重回帰分析を行ったところ、 $R^2 = .295$ となった。ここで、同じ変数に対してステップ・ワイズ法による取捨選択を行ったところ、一般的な心理傾向に関連する要因のうち2つは削除され、体育に対する態度(尺度1)、英語に対する態度(尺度2)、英会話効力感および対人関係効力感の4要因が選択された(表2参照)。

なお、英語による実技指導を求める傾向に対して、英語に対する態度(尺度2)が最も大きく関与しており、次に体育に対する態度(尺度1)が関与する割合が大きい。英会話効力感ならびに対人関係効力感については、 $R^2$ の変化量から、全体に対する説明力としては小さいことがわかる。また、一般的な心理傾向の影響を探る目的で3つの尺度を用意したが、上記の主要

表2. ステップ・ワイズ法による回帰分析の結果

ステップ	説明変数	R <sup>2</sup>	回帰係数	F比
1	英語に対する態度	.187	.433	9.808**
2	体育に対する態度	.276	.298	7.155**
3	英会話効力感	.285	-.105	2.281*
4	対人関係効力感	.292	.091	2.106*

note) \*\*p<.01, \*p<.05

3尺度と同時に回帰式に投入した場合、有意な影響が認められたのは対人関係効力感だけだった。これは他の2つの心理傾向尺度で測られた要因の効果が、選択された4要因の中に含まれてしまったためと考えられる。

#### 4. 考察

体育実技を英語で指導する際に想定される学生の反応を、質問紙調査によって探索してみた。やはり、英語に対する学習意欲の高い学生の方が、体育のイメージプログラムに関心が高かった。同様に、体育に自信がある学生や英会話に自信のある学生の方が、そうでない学生より英語による体育実技の指導に対して受容する傾向は高かった。また、興味深いのは、対人関係効力感が英会話効力感の回帰式投入後にも有効な説明力をもったことである。友人作りや意志の疎通など対人関係能力に自信のある学生の方が、英語による実技指導を受け入れやすいというのである。対人関係の維持発展を苦にしない自信が、英語という不慣れな言語によるコミュニケーションに対して、何とかなるだろうという見通しを抱かせやすいのかもしれない。

こうした結果から考えられるイメージプログラム実施上の留意点として、体育におけるチーム活動では、まずチーム内の良好な人間関係作りを優先する必要性である。対人関係効力感の低下がイメージプログラム参加の意欲を減少させる可能性が多少ともあるわけで、チーム内に困難な人間関係が発生することは、イメージプログラムによる教育効果の阻害要因である。

また、挑戦意欲の強弱が英語による体育実技への態度に影響を与えていないということから、体育のイメージプログラムを困難な（したがって挑戦のし甲斐がある）プログラムとして学生たちに提示することは、控えた方が良さそうである。挑戦意欲が顕著に関与しているならば、それを刺激するような課題設定をすることで、履修者のコミットメントは高まる可能性が増す。けれど、この場合はむしろ、英語や体育に対する興味や意欲を刺激する新奇な活動として紹介・勧誘する方が、初発の取り組みにおける心理的抵抗は低減できそうである。

#### 今後の展望と課題

今調査では、英語に対する学習意欲と共に、体育への好感度あるいは自信もイメージプログラムへの受容度に影響を与えていることが示された。すなわち、体育に自信があれば、その指導が英語であっても受け入れる傾向が高いのである。しかしながら、仮に体育に自信がないと答えた学生であっても、学習活動の難易度やグループ編成および評価基準を調整することで、彼らの拒否的な態度を大きく改善する可能性が、体育のイメージプログラムには考えられる。

それにはまず、難しい体育実技の指導を受ける、あるいは各自の運動能力・実技の巧拙を評価されると感ずる場面設定を避ける。そして共に参加する形の身体活動を行い、活発な双方向的なコミュニケーションが必要とされる時間を共有する。そうすることで、教授する側も学生も偶発的なハプニングや興奮を経験するチャンスが多い体育授業をアレンジすれば、体育やスポーツに対する自信とは無関係に、歓声を上げたり、身体表現の助けを借りながら、意思を伝え合う場면을豊富に持つことができよう (Weinberg & Gould 1999)。個人の技能や知識の優劣あるいは単なる出席数による評定よりも、個人差を尊重しコミュニケーションのパートナーシップを重視する学習活動を展開することが、体育実技では可能である (Schmidt & Wrisberg 2000)。したがって今後は、体育実技の授業内容と英語による指導に対する受容度との関係を視野に入れた調査を行ってみたい。

今回の調査では一般的な心理傾向を測るために3つの尺度を用意したが、尺度項目間の信頼性を示すクロンバックの $\alpha$ は必ずしも望ましい高さを示さなかった。これは用いた項目数の不足および尺度同士の類似性の高さが問題だったと思われる。また、全部で6つの要因を回帰式に投入しても $R^2=.30$ 程度に止まったことは、他にもイメージングプログラムに対する態度形成に強い影響を与える要因の存在が考えられる。さらに、質問紙調査の限界でもあるが、体育実技を英語で指導された経験がない者にとって、たとえば自己決定回避傾向が顕在化するほどにリアルな状況をイメージしての回答だったのかも不明である。このような調査方法自体の問題については今後の課題としたい。

## 5. 参考文献

- 久保田秀明・関田一彦 (2001) 英語表記に対する大学生の反応に関する調査報告創価大学教育学部論集51号, pp 87-91.
- Siegel, L. S. (1998) Phonological Processing Deficits and Reading Disabilities. *Word recognition in beginning literacy*, 141-160.
- Siegel, L. S. (1999) Presentation of Linda Siegel; *The Canadian Experience*. *English Learners*, January, 3-6.
- Weinberg, R. S. and Gould, D. (1999) *Foundations of Sport and Exercise Psychology* 2nd ed. Human Kinetics, pp. 203-219.
- Schmidt, R.A. and Wrisberg, C. A. (2000) *Motor Learning and Performance* 2nd ed. Human Kinetics, pp. 3-51